

カルガモの飛来から考える地球温暖化

田園調布学園中等部 3年 神尾 樹里

私は今、マンションの屋上緑化に隣接するベランダでカルガモ親子の世話をしている。去年、カルガモが七羽の雛を連れて突然現れ、今年も十羽の雛を連れて現れた。マンションの屋上緑化部分は閉鎖的で、芝と低木しかないが、その木の中で巣を作って孵化したようだ。母ガモの後ろを雛達が行列をなして歩く様はとても可愛らしく、心が和んだ。

カルガモは孵化してすぐに引っ越しを始めるが、ここは移動ができず、水場もないため、桶やプールを設置して様子を見た。カルガモの雛は飛べるようになるまでに二～三ヶ月を要するため、どうしたら良いかと役所に相談したが、野鳥は捕獲・保護ができないため、そのまま見守ってもらうしかないとの返答だった。近年、各地の屋上緑化でも同じような状況が見られているようだ。母と私は、毎日水の交換などの世話をした。雛達は芝を駆け回り、プールで追いかけてっこをするなど、カラスなどの天敵に狙われることもなく、のどかな生活を送っていた。少しずつ大きくなっていく雛を見て、飛び立つ日を心待ちにしていた。二ヶ月弱が経ったある日、雛がマンションから転落し、去年の七羽は全滅してしまった。残された母ガモが子供を探す姿は切なくて、母と泣いた。なので今年は、屋上緑化にカルガモは来ないと思っていたが来てしまったのだ。なぜ、カルガモは、暑くて水場もないこの場所を選んだのか。

人間は、自分達が暮らしやすいように町を都市化させ、次々と自然を破壊し、動物たちの住む場所を奪っている。動物たちは限られた生息区域で縄張り争いや、天敵から身を守りながら生きる場所を必死に探して生きている。そのような状況だからこそ、再び屋上を選んだのではないか。しかし、人間との共存は難しく、鳴き声などでカモが屋上にいることを好意的に思わない人がいたり、雛が転落によって亡くなっている現状は見過ごせない。やはりちゃんとした自然の中で生まれて巣立ってほしい。

現在の地球では、人間の欲望のまま開発を続けた結果、地球温暖化による森林火災、ヒートアイランド現象、豪雨などの環境破壊が進んでしまっている。そのため、動物たちも生きづらい地球になってしまっている。このような状況を目の当たりにし、危機感を持った人々は対策にのりだした。パリ協定では「脱炭素社会」を目指して、温室効果ガス削減の取り決めをし、二〇三〇年までに四十六パーセント削減することを目標とした。実現させるにはとても難しいことだが、私たち一人一人がエネルギー消費の削減を意識し生活するだけでも、少しずつ変わっていくはずだ。

地球は一つ。人間も動物も同じ地球に住んでいる同じ命。共存できる住みやすい世界になってほしいと願う。そして、現在四羽になってしまった雛だが、元気に飛び立ち、この狭い屋上以外の広い世界を飛び回ってほしい。